

第5回東日本大震災伝承シンポジウム in 富岡 プログラム



「東日本大震災被災地の伝承活動と担い手育成の現状・課題」

13:05～13:20

3.11 被災地域における震災伝承人材育成の現状と課題について、概観します。

中川政治（公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク 専務理事）

国際協力 NGO 職員としてヨルダンのイラク難民支援、ハイチ地震被災者支援事業に従事。東日本大震災発災後、石巻災害復興支援協議会（現：公益社団法人 3.11 メモリアルネットワーク）の設立に携わり、語り部等の住民主体の伝承活動、東北3県の連携をサポート。



第1部 話題提供「福島における伝承人材育成の取り組み」

13:20～14:20

福島県内の行政・学校・民間それぞれの伝承人材育成の取り組み事例について、お話を伺います。

森合耕一さん（福島県 文化スポーツ局 生涯学習課）

小学校から福島県生涯学習課へ異動となり行政職1年目。主に「次世代へつなぐ震災伝承事業」を担当。

高橋敏哉さん（福島県 教育庁 高校教育課）

着任2年目。大学入試や探究学習、国語の教科指導等に関する業務とともに「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」を担当。



南郷市兵さん（ふたば未来学園中学校・高等学校 副校長）

IT企業勤務を経て文部科学省入省。東日本大震災後は、被災三県と連携した創造的復興教育の推進を推進。ふたば未来学園の開校準備も担当し、2015年の開校と同時に副校長として着任。同時に中央教育審議会教育課程部会専門委員を務める。著書に『希望の教育』（東洋館出版社、2014）等。



青木淑子さん（NPO 法人富岡町3・11を語る会 代表理事）

1970～2008年、福島県内の県立高校で国語科教員として教鞭をとる。東日本大震災後は、富岡高校校長時代から深く関わった富岡町を中心に被災者支援を行い、2015年には「富岡町3・11を語る会」を設立、語り人（べ）活動や町民劇に取り組む。



第2部 パネルディスカッション

パートI「学校・地域で伝承の担い手を育むために」

14:35～15:35

震災の記憶のない世代が増える中、学校現場で震災伝承に触れるきっかけや仕組みづくりが大きな鍵を握っています。同時に、その学びをサポートする地域で活動する方々の存在も欠かせません。学校・地域の連携の中で、いかに次世代の伝承の担い手を育むことができるか。

被災状況や地域の特性をふまえ様々な形で震災学習を実践し、日々若い世代と向き合っている4人の登壇者とともに考えます。

南郷市兵さん（ふたば未来学園中学校・高等学校 副校長） ※第1部にも登壇

青木淑子さん（NPO 法人富岡町3・11を語る会 代表理事） ※第1部にも登壇

松原久さん（東北大学課外・ボランティア活動支援センター 特任助教）

1989年大阪府生まれ。2012年に東北大学大学院へ進学し、東日本大震災学生ボランティア支援室の学生スタッフとして、被災地支援活動を経験。2019年から現職で、ボランティア活動の支援（とくに震災・災害関係）、社会貢献型体験学習（サービス・ラーニング）の開発等へ従事。



伊藤聡さん（三陸ひとつなぎ自然学校 代表）

東日本大震災直後の2011年3月より、岩手県釜石市を拠点にボランティアコーディネーターから活動を開始。自身も津波で家が全壊するなど、いわゆる被災者ではあるものの、生まれ育ったまちの復旧・復興に責任ある立場として取り組むため、2012年4月に「三陸ひとつなぎ自然学校」を設立。現在は「若者の育ち」をテーマに、放課後の居場所づくりや、様々な体験活動の提供を行なっている。



進行役：藤間千尋（3.11 メモリアルネットワーク 理事）

神奈川県出身。石巻での震災ボランティアを通じて、平成23年10月、横浜から石巻に移住。みやぎ東日本大震災津波伝承館の運営業務や津波伝承ARアプリ等を用いた伝承活動等に積極的に取り組んでいる。





第2部 パネルディスカッション パートII「わたしたちの次の世代に伝え継ぐために」

15:35～16:35

「次世代への伝承」が取り上げられるとき、漠然と大きな期待を託されがちな「若い世代」ですが、一人一人異なる経験をして、異なる考えを持ち、異なる道を歩んできています。自ら望んで語り部になる人、職業を通じて伝え継ぐと考える人、自分にフィットする関わり方を探る人…。

このセッションでは、東北出身の4人の登壇者それぞれの軌跡をグラフで可視化し、「わたしたちの次の世代に伝え継ぐ」ことについて、等身大の思い、関わり方を伺っていきます。

島山歩さん（津田塾大学 2年生）東京都在住／福島県富岡町出身

ふたば未来学園4期生。富岡町の夜の森地区出身で、震災当時は小学校2年生だった。当時の自宅が原発から約5キロのところであり、避難を余儀なくされ、いわき市に避難する。大学進学後にふたば未来学園の卒業生コミュニティ運営を始め、地域や学校とのつながりを維持できるようなイベントや報告会を行っている。



齊藤幸子さん（宮城教育大学 3年生）宮城県仙台市在住

宮城教育大学の自主ゼミ「311ゼミナール」内の「原発事故と教育を考える班」に所属し、3年目の取り組みとなる。様々な立場にいる被災者の方々の思いを受け取り、被災体験がない身として、震災の記憶がない子どもたちに、震災のことをどのように伝えていったらよいかをテーマに活動している。



川崎杏樹さん（いのちをつなぐ未来館 職員）岩手県釜石市在住

釜石東中学校2年生の時に東日本大震災を経験。学校から約1.6km離れた高台に避難し、助かることが出来た。2020年より震災伝承施設「いのちをつなぐ未来館」にて勤務。当時の体験や防災教育について語り、未来へのいのちをつなぐために伝承活動を行っている。



阿部任さん（3.11メモリアルネットワーク 職員）宮城県石巻市在住

東日本大震災当時高校1年生。石巻市門脇町にあった祖母宅に帰省中に震災を経験。家ごと津波に流され震災発生から9日後に祖母とともに救助された。判断を誤り、避難行動をとらなかった後悔と、「奇跡の救出」と報じられたことのギャップに苦しんだ経験を伝えている。また昨年からは3.11メモリアルネットワーク職員として伝承活動をサポートする立場としても活動を開始した。



進行役：永沼悠斗（大川伝承の会／3.11メモリアルネットワーク 理事）

3.11当時は高校生。2014年より大川伝承の会で語り部活動を開始、「失われた街」模型復元プロジェクト記憶の街ワークショップ in 大川地区 実行委員を務める。3.11メモリアルネットワーク「若者プロジェクト」メンバーとして、若手語り部の連携やメディアと取材対象との対話機会創出に尽力。



第3部 総括

16:35～16:55

次世代へ震災を伝え継ぐ担い手を育むためには、どのようなサポートが必要か。

学校・地域で震災学習と若い世代の思い・関わりをふまえて、具体的なソフト面の方策を議論し、本シンポジウムのまとめとして、提言を行います。

佐藤翔輔さん（東北大学災害科学国際研究所 准教授）

2011年、東北大学・助教に着任し、2017年より現職。専門は災害伝承、災害情報。令和3年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞など受賞。3.11メモリアルネットワーク・アドバイザーほか、官民の災害伝承関連のアドバイザーをつとめる。主な監修書に「災害伝承の大研究（PHP研究所）」。



神谷未生さん（一般社団法人おらが大槌夢広場 代表理事）

米国の大学を卒業後、同国で正看護師となり大学病院勤務、海外派遣医療団を経て、青年海外協力隊として途上国医療に携わる。東日本大震災では国際NGO職員として大槌町で緊急支援に従事し、その後移住。国内外からの視察受け入れや、大槌町役場庁舎の教訓を学ぶプログラムを開発・実施している。



武田真一（3.11メモリアルネットワーク 代表理事）

東日本大震災時に河北新報社報道部長。編集局次長などを経て2016年4月新設の「防災・教育室」室長に就任。震災伝承と防災啓発のプロジェクトに取り組んだ。2019年3月定年退社し、宮城教育大学の新設組織「311いのちを守る教育研修機構」を担当する。

